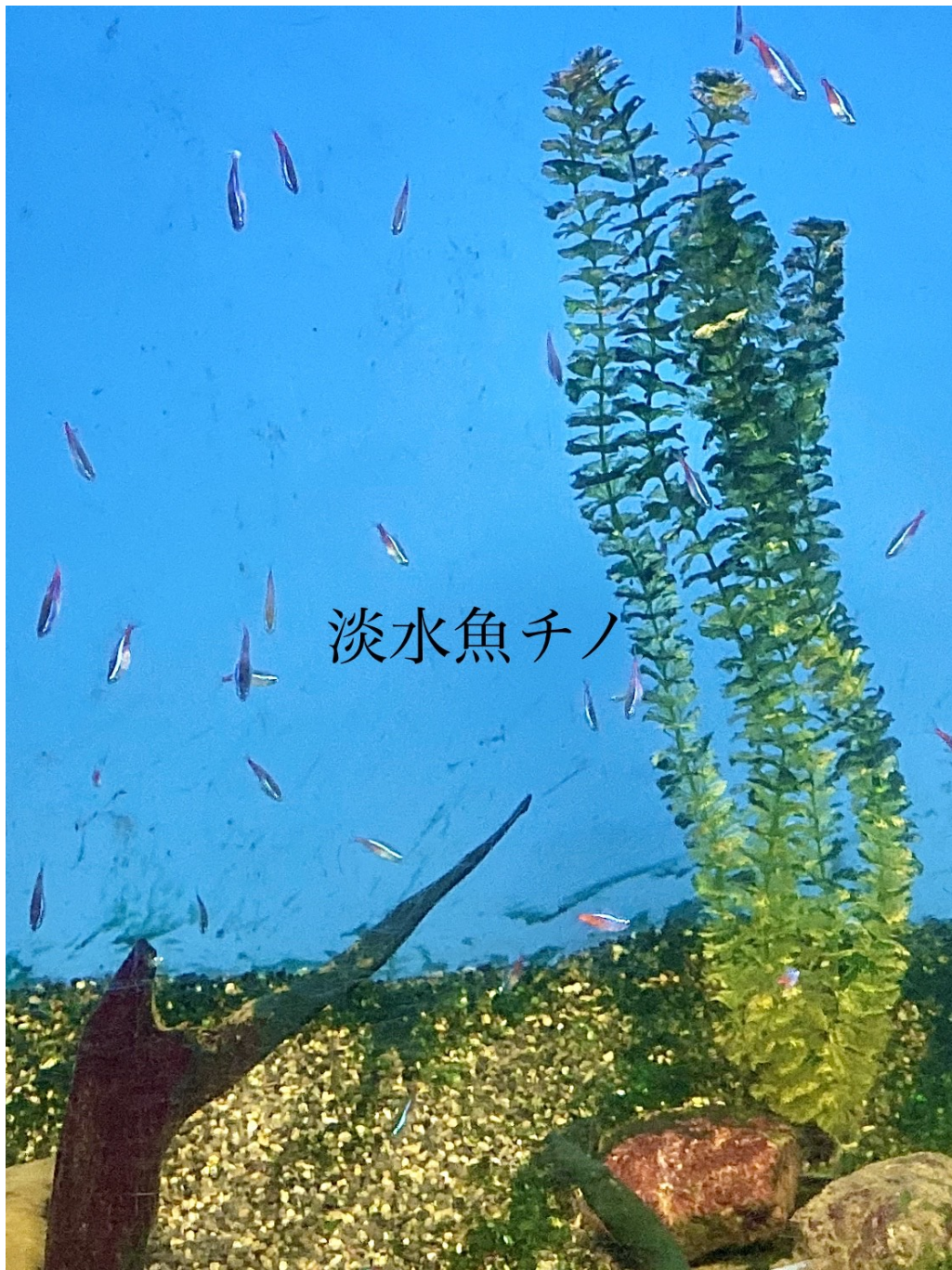




淡水魚千ノ

目次

あるところに、チノと呼ばれるお魚がいました。

チノは淡水魚でした。

チノは穏やかな川の流に身をゆだね、お友達と楽しく遊び、またあるいは住みかの裏手の急流で、じぶんの身体を使って、どこまで上れるかなど、たくさんチャレンジをしていました。

陽射しの強い日も激しい雨の日も、チノは元気です。

チノは川底で気になるものを見つけては、お父さんとお母さんのもとへ持ち帰りました。

お父さんは「面白い石ころだな」

お母さんは「きれいな色ね」

と、チノと一緒に楽しみました。

チノもなんだか褒められたような気がして、もっといろいろなものを持ち帰ったものでした。

あるときには、チノはお友達と遠くまで泳ぎました。

見たことのない草木や花、土、ほかの生きものたち、音色、匂い、いつもの川とつながっている場所なのに、水の味もちがうみたい、チノたちはワクワクしてえらをふくらませました。

しばらく行くと、大きないかつい顔の魚が岩に張りついていました。その身体はごつごつとして、硬そうです。

「お前たちは、どこからきたんだ」

その声はチノたちの身体をぐらぐらと揺らすほど、水中をとどろきました。

チノのお友達は「こわい」と言って、チノの後ろに隠れます。

「上のほうから」

勇気を出して、チノは答えました。

「どうしてこんなところまで、きたんだ」

いかつい魚は尻尾をふるわせ、たずねます。

「遠くまできたくなったから」

チノはお友達の顔をみて、返事がまちがっていないか確認します。

お友達はいうんうん、とひれを動かしました。

「この辺りはおれの場所だから、くるな」

「どういうこと」

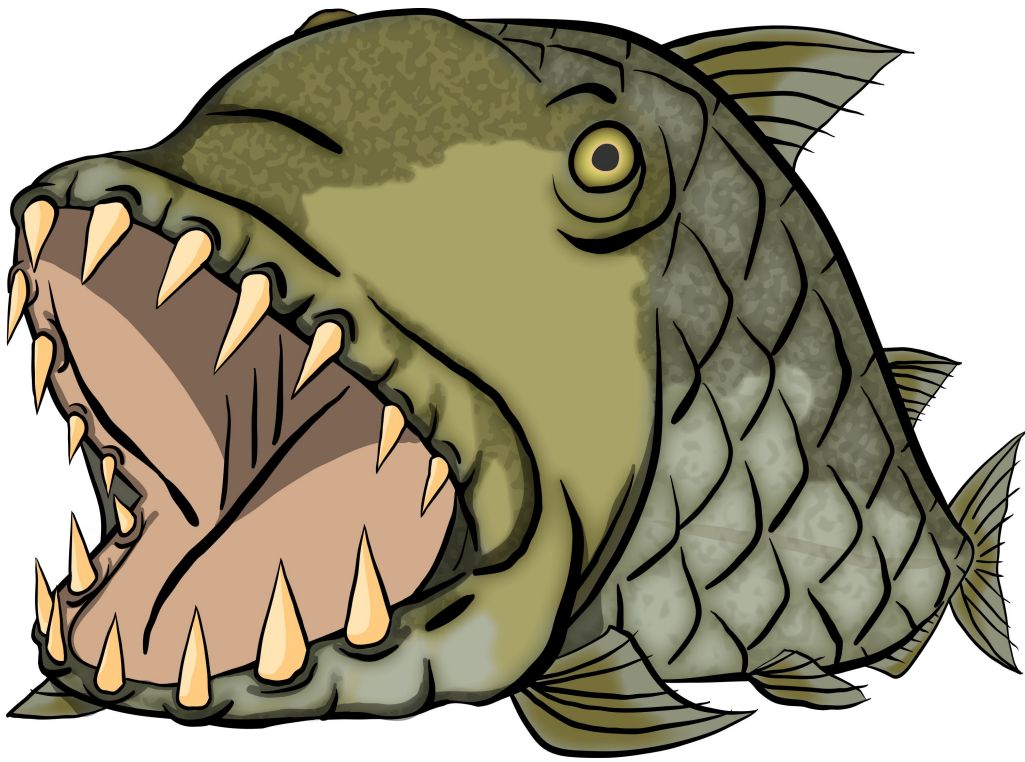
これにはチノもちょっとむっとしました。

「川はつながっているんだから、だれのでもないでしょう」

「うるせえ」

いかつい魚はあんぐりと巨大な口を開けました。

「おれはここにいるんだ」



{{-
-}}

淡水魚子ノ（試し読み版）

版番号の予定

著 者 書籍情報の編集ページから、著者情報を入力してください

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
